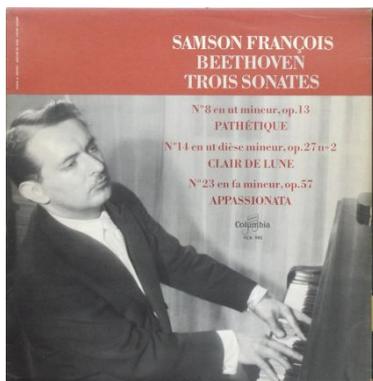


＜今週のお宝盤＞

受付期限：2026年4月1日

第9099番 天才フランソワのベートーヴェン



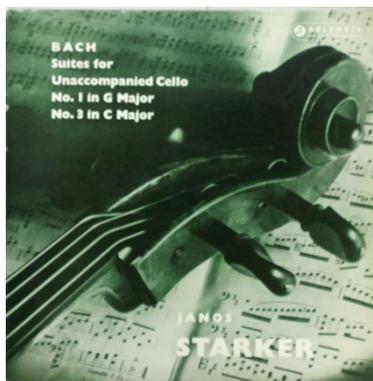
税込66000円

仏パテ/SAXF 985 / 1963年録音 / ステレオ / 棒付きジャケット / G

ベートーヴェン 三大ピアノ・ソナタ集 『悲愴』、『月光』、『熱情』 サンソン・フランソワ (p)

フランソワのベートーヴェンと言ったら多くの人が首を傾げるだろう。だが、イーヴ・ナットへの嗜好を膨らませたものが何度も聞こえてくると言ったらおかしいだろうか。確かに彼は天才的な閃きをショパンに見せる。だが、ショパンもまたスタートはベートーヴェン研究であった。何を言いたいと言えば、恐らくは深い響き無しではベートーヴェンではないと言う人が多いだろうが、例えば「悲愴」の第2楽章の人間味あふれる感性と穏やかな音の運びは、他の演奏家には中々聴かれまいだろうし、それだけに得るものは多い。終楽章に入れば、フレーズの処理に微妙な輝きを幾度も見せてくれる。フランソワには珍しい重い響きを聴かせたと思うや、ガラス細工のように繊細な音が跳ねたり弾んだりする。有名な「月光」の三連符の繋がりでも、決して単調な流れには陥らない。ショパンのルバートには及ばないものの、薄紙が入るくらいの僅かな隙間をちょっと見せてくれる。これが、聴きなれた音楽をフランソワ流に変えてしまう魔術なのだ。この曲ではペダリング技術も際立っている。決して音を濁らせない工夫はどのようにして生まれるのだろう。ベートーヴェンの聴き方に刺激を与えませんか。(山田)

第9100番 シュタルケルのバッハ無伴奏



税込66000円

英EMI / 33CX 1656 / 1957年録音 / モノラル / G

バッハ 無伴奏チェロ組曲第1、3番 ヤーノシュ・シュタルケル (vc)

数年たたぬうちにマーキュリーでステレオ録音を再録したために、この演奏は不当にも忘れ去られてしまった。24歳で録音したコダーイの無伴奏ソナタで世界を驚かせたシュタルケルは、この時33歳。ライナーの振るシカゴ交響楽団で主席を務め、独り立ちして録音したのがこれである。それでいて、これ程自信に満ちた響きがどこにあるだろうか。シュタルケルの技術はカザルスを含めた歴史的チェリストの中で最高であったと言われていた。あまりにも完璧な故に重箱の隅をほじくるような批評家からの苦言もあった。しかし、この演奏の持つ説得力に口を挟める者がいるだろうか。この作品は演奏者を得てこそどこまでも輝く。このような音楽作品は滅多にない。多くのチェリストの鳴らす音は“エチュード”の域を出ない。それに深味すなわち精神性を与えるのは一握りの演奏家だけだ。この演奏家の前にヴィルトゥオーゾという言葉は霞んでしまう。旨いという言葉ではなく“完璧”と加えなければならない。それは正確無比と言い換えてもいいし、恐らくはバッハが考えたよりも遙か先の表現をしているのではないだろうか。深みを求めるならカザルスを聴けばよい、人間味に触れたいならフルニエを聴けばよい。だが、総合点と言うことであればシュタルケルのこの録音を私は挙げたい。(山田)